

せんだい寸景

NO11 2005年2月

発行：じっかい電腦事務局

貞山堀の岸边 塩釜探訪

塩釜は元気がない。商店街に人の姿がない。シャッターを下ろしたままの商店がそちこちにある。白石、古川、気仙沼、石巻、近年地方都市はみな同じ衰退の一途だ。塩釜はかつての栄光が大きかっただけに「無残」ひとしおだ。その塩釜の東部を一筋の運河が流れその岸边に傾いた「廃屋」がある。目の前の運河で鍛えた男たちが日本一に輝きローマ五輪出場を果たした。そう、東北大エイトクルーはここが本拠地だった。東北高校、塩釜高校、そして一高。各校の艇庫が軒を連らね運河を、そして塩釜湾から松島湾へとボートを漕ぎ出した。昭和30年代のことだ。

だいたい一高にボート部があったなんて知ってたかな。正式には漕艇部といい戦前からの歴史を持つ。一高生徒会誌「創造」8号(昭和30年)の同部活動報告蘭の1年部員(つまりじっかい生)の項に永野清人=のちに主将・仁田新一・塚田宗広・東野政道・宮内通雄・立花佳夫・西川充久・浅野公道・前原一雄の名が見える。東野をのぞいてみな塩釜あるいは隣接の出身者だ。

あのころ漁業の町塩釜の盛況ぶりは想像を絶する凄まじさで沖が時化ると何百隻という漁船が避難寄港、数千人もの男たちがちまたにあふれだす。一糸まわぬ裸身、手には焼酎の一升瓶。それが群れをなして道を行き交うのだった。そんな港町で明治からつづく建設業の家に塚田宗広が、宮内通雄は同じく水産加工業の家に育った。

一枚の写真がある。昭和31年夏一高が初出場の東北大会(秋田県本荘市)で準優勝、メンバー7名のうち5名を永野ほかの2年生で占めた。塚田、宮内の姿も見える。

塚田は塩釜三中時代から秀才で知られ生徒の人気者だったという。義侠心が強く仙石線通学の一高生が他校生からの圧力を免れたのは彼の力による一とよく耳に

した。漕艇部でも後輩から慕われた。合宿中など勉強をみてやる姿があったという。宮内は小さな身体を生かし艇の舵を取るコックスだった。内気で逆らうということのみたことがない。が、しかし負けん気は人一倍で頑固な一面があった。舵取りにむいた性格だったということか。ふたりはそれぞれに家業を継ぎ死力を尽くし塚田は28才で世を去り、宮内は独自の製品を開発し塩釜いや東北有数の規模まで成長させ64才で他界した。

貞山堀は日本一長い運河である。阿武隈川と北上川を結ぶ50Km余の運河だが四百年ものむかし仙台藩祖政宗の時代に着手、完成したのは明治に入ってから



夕暮れの貞山運河 右中央が各校艇庫 いまはゴーストタウンのようだ



廃屋となった一高漕艇部艇庫



東北大会準優勝の一高クルー・前列左から宮内・高橋喜美男(3年・主将)塚田後列左から仁田・永野・鶴見(3年)西川

だった。各所によって呼び方が違うが南半分を「貞山堀運河」土地のものは貞山堀という。貞山とは政宗の諡名である。あのころ堀は各漕艇部の練習コースとなり一高も南は10数キロ離れた閑上まで、あるときは松島海岸へと遠漕をして鍛えた。ときにはオカに上陸して「おいしい」ものをグビリとやった。2年で腰を痛め手術、退部した立花佳夫には忘れられない思い出だ。

さて前出の東野政道だが当時の誰もが「記憶にない」という、三年間名簿にあるというのに。これは推論だが塚田の「思いやり部員」ではなかったか。当時を知る中村利弘は「塚田の家によく東野がいた」と証言する。誘われて塩釜に遊ぶ東野。塚田は名前だけでも、と部員にした。というところか。塚田の墓は塩釜・旭町願成寺に、宮内は仙台市宮城野区新田・本門佛立宗・円護寺。ともに高台にあり気持ちがいい。東野は仙台・新寺は正楽寺で奥さんとともに眠る。一高漕艇部は昭和34・34年と国体に出場。東京国体では6位の記録を残した。しかし平成15年廃部、百年を超

す歴史を閉じた。県内の学区が南北に分割され漕艇やヨット部員の供給が絶たれた。それから30年余がすぎた。廃部は「自然死」ということか。

冬の烈風にガタガタ揺れる廃屋の暗い室内に一艘のボートが転がっていた。塚田や宮内に乗った「しおかぜ号」だろうか。お前は葬送もなくここで朽ち果ててゆくのか。